第3章 交通事故

01 — 道路の向こう側

事故報告書は、一人の人生を語るためではなく、事件を終結させるために書かれていた。濡れた路面、故障した交通信号、緊急誘導で走行していた貨物運搬車、そして死者の名前。最後の行によれば、ダニエル・リードは生き延びた。その生存が彼にとって何を意味したかは、記されていない。

ロイが暫定評議会の証拠室で報告書を読むあいだ、レイチェルは作業場から運ばれた紙の写しを調べていた。窓の外では朝の配給待ちの列が建物の向こうまで続いている。人々には今も水と薬が必要だった。誰を一人の人間として数えるのかという都市の論争は、彼らの調査中も終わっていなかった。

クロノスは向かい側の椅子に座り、床に届かない足を下げていた。金属製の円筒を封印したままにしてほしいと頼んで以来、口数が少ない。ロイが事故現場の地図を置くと、少年は手を伸ばして九十度回転させた。

「トラックはここから来たんだ」。公式図面では通行止めになっている脇道に触れた。

「覚えているのか？」とロイ。

「目を閉じると見える。でも、それは同じ答えじゃない」

レイチェルは訂正しなかった。地図の日付は、今の少年が宿る軍用身体より古い。記憶なのか、移植された再構成なのか、それとも繰り返し聞いた話が見た光景のように感じられるのか。どれも検討に値する。そして、どれも本人に代わって結論を決める許可にはならなかった。

02 — 運行指令員

事故の目撃者が一人、まだ生きていた。マーラ・セン。かつて交通管制の指令員だった彼女は、すでに市の交通網から引退している。少年に記憶の実演を求めないことを条件に、市の資料館での面会に同意した。ロイは条件をそのまま受け入れた。

センはビニールに包んだ紙の手帳を持参した。貨物車の緊急送信機が沈黙していると最初に気づいた指令員だった。手帳には、ありふれたミスが連鎖していく様子が記されていた。故障した道路センサー、間違った交差点に派遣された保守班、コンクリートの防護柵が撤去された後もコンピューター上では開通扱いのままだった緊急迂回路。

「陰謀ではありません」とセンは言った。「少なくとも私が見た範囲では。全員に少しずつ責任があるから、誰も引き受けたがらない類いの失敗です」

彼女は現場で描いた略図をレイチェルに示した。その角度は、クロノスが地図を回転させた向きと一致していた。レイチェルは隣にいる少年の注意が鋭くなるのを感じた。

「男の子はいた？」とクロノス。

「事故現場にはいなかったわ」とセン。「いたのは研究所のバッジを着けた青年と、彼の呼吸をつなぎ止めようとしていた人たちだけ」

クロノスはうなずいた。その区別は少年を傷つけたが、同時に彼はそれに感謝しているようにも見えた。

03 — 救命を支えた署名

緊急手術は、リードの勤務先が代表者を送り込むより前に始まっていた。外科医たちはまず通常の治療で可能な修復を施した。臓器が機能を失うと、一部のレプリカント用途では承認されているものの、人間の身体再建には認可されていない実験的な組織を要請した。一人の医師が条件付きの申請書を書き、自分の名で署名した。

署名は今も読み取れた。この記録は、企業が患者を奪ったという単純な物語ではない。通常の処置では生存できない患者を救うため、誰かが自らの職業人生を危険にさらしたのだ。だが、後年の経営陣は、その慈悲深い行為を彼への所有権主張につながる鎖の最初の輪に利用した。

ロイは手術の日付を連続性の台帳と照合した。最初の移植には人格のコピーなど必要なかった。ダニエルの損傷した脳は生きていた。代替組織は生き残った神経経路を支え、その経路が回復し、あるいは周囲に適応して変化するのを助けた。そこには普通の回復期があり、痛み、リハビリ、怒り、手の震えがひどくて文字を書けない日々があった。

「じゃあ、そのときはまだ彼自身だったの？」とクロノス。

「その問いを本人が口にできるまで意識を取り戻した、ということよ」とレイチェル。「いつから周囲の人がその声を聞かなくなったのかは、これだけでは分からない」

センの手帳には救助当番の終了が一文で記されていた。《患者は眼鏡を求めた》。その細部は、手術図面よりも長くロイの心に残った。

04 — 身体の半分

ヘリックス社では、修復が産業になった。残されている同意書の一通は、損傷した腎臓と神経組織の一部を交換する許可だった。

しかし後年の文書では、それが期限のない身体再建への承諾として扱われていた。二つの文章の違いには、企業にとって何百万という価値があった。

医療図面に描かれているのは、人間の身体とレプリカント由来の生きた組織が、血管と神経の架け橋で結ばれた姿だった。歯車も装甲もない。図面と現実の間には、何か月にもわたる感染、拒絶反応、適応、気の遠くなるようなリハビリがあった。移植が成功しても、熱、圧力、痛みを感じるあり方が変わることがある。

写真には、窓際に立つダニエルが写っていた。片腕は支持具で支えられている。セバスチャンの作業場にいた若い研究者より年を取って見えた。その傍らにはレイチェルもいた。彼女は自分の顔をじっと見たが、写真の場面をすべて覚えているとは言わなかった。

「お見舞いに行ったのね」と言った。「病院の匂いを覚えている。私のことが分かるかと尋ねるのが怖かったことも」

クロノスは身を寄せたが、写真には触れなかった。

「分かったの？」

「どうして入口に立っているのかと聞いて、それから私の座る場所を空けてくれた」

しばしのあいだ研究記録は、所有権争いではなく、二人の人間の歴史になった。

05 — 二度目の回復

事故から数年後、再び機能障害が起きた。再建された神経組織の一部が劣化し始めたのだ。ヘリックス社は、機能を担う細胞を交換する前に、その活動パターンを複製する手法を開発した。技能、話し方の癖、そして自伝的な記憶の多くが保存された。報告書は、そう名づけさえすれば証明できるかのように「連続性」という言葉を使っていた。

処置を越えてダニエルの主観的な経験が続いたことを示す記録はない。ある男が治療に入り、その後に同じ名で呼びかけられて応じる誰かがいた。それだけだった。書類では技師が《転送成功》という文言に二重の下線を引いていた。

クロノスはその文言を声に出して読み、紙を置いた。

「僕は二人目だったのかもしれない」

「そうかもしれない」とロイ。

「あるいは最初の人。あるいは、その二人の話を聞かされた別の誰か」

ロイは確かな答えで安心させたくなる誘惑を知っていた。自分も長いあいだ、人々にそうするのをやめてほしいと求めてきた。だから少年の前へ書類を寄せ、不確かな日付を自分の目で確かめられるようにした。

「記録に何が起きたかは調べられる」とロイ。「でも、お前の持っていない記憶を記録から作り出すことはできない」

クロノスは自分の手を見つめた。「だったら、僕が永遠に生きてきた証拠だなんて言わないで」

06 — 会社の所有物

かつてヘリックス社の弁護士は、ダニエルを生かすために使われた材料は会社の資産だと主張した。初めは医療機器についての請求だった。それがやがて彼の労働、移動、将来の治療を管理する権利の主張へと広がった。身体が必要とする薬品と組織を会社が握っていたため、誰にも異議を唱えられず、その権利主張は二度の企業合併を生き延びた。

レイチェルは独立審査委員会へ提出するため、該当条項を写した。ロイは別の文書を見つけた。最初の手術から何年も後にダニエルが書いた退職届だ。ダニエルは、同意を撤回できない患者を対象とする実験への参加を拒んでいた。会社は退職届の受領を認めたが、医学的監督から彼を解放しなかった。

「辞めようとしたんだ」とクロノス。

「この書類によれば、そうだ」とロイ。

「辞められたの？」

「いや」

短い答えだった。それが部屋の空気を変えた。後年の軍の採用記録では、クロノスは以前の人生が任務と無関係な、自発的に志願した専門要員だと記されていた。ダニエルの自由がすでに損なわれていたなら、その表現は信頼するのではなく検証すべきものだった。

07 — 音の記憶

最後の医療記録には、封印された音声記録の円筒が添えられていた。ダニエルが最初のリハビリ中に録音されたものだった。技師は身近な音を聞き分けるよう求めている。流れる水、橋を渡る列車、実験室のタイマーがゆっくり鳴らす音。

クロノスは最後の音だけを再生してほしいと頼んだ。

スピーカーから乾いたクリック音が三度、間を置いてもう一度聞こえた。少年は目を閉じた。資料庫の外ではエレベーターが震えながら動き始めた。数秒のあいだ誰も口を開かなかった。

「間があることを知っていた」とクロノス。「鳴る前から」

ロイは機器を確かめた。再生するたびに同じ順序が記録されている。音の記憶は奇跡ではない。軍の訓練データから届いたのかもしれず、以前の再建のどれかを通じたのかもしれない。まだ特定できない別の経路もあり得る。

「もう十分？」とレイチェルが少年に聞いた。

「続きを聞きたくなるくらいには。でも、声が僕のものだと呼べるほどじゃない」

続きをいつ聞くかは少年が決めることで合意した。古い録音は机に残された。埋もれさせることも、合格を強いる試験として利用することもしなかった。

08 — 報告書に書かれなかったこと

夕暮れ、センが最後の紙片を持って戻ってきた。救急車の出動記録は複写状態が悪く、公式ファイルでは下端の一行が欠けていた。彼女の元の手帳には残っている。警察が現場を封鎖する前に密閉型の車両が到着し、ヘリックス社の女性が実験用の医療資材を外科医に提供するより先に、患者の名前を尋ねていた。

その記述は事故が計画されたものだと証明しない。しかし、ヘリックス社が残存する公式報告で認めた以上のことを、事故への対応について知っていた証拠にはなる。同じ女性のイニシャルが、二十年後の二度目の回復処置のそばにも記されていた。

レイチェルは古い人事書類とイニシャルを並べた。「誰かが長いあいだ、この件に関わり続けていたのね」

「会社がその女性の承認を使い回していた可能性もある」とヌル。「署名の原本が必要だ」

クロノスは立ち上がった。「なら、その人に聞こう。まだ生きているなら。死んでいるなら、残したものを探そう」

ロイは少年を見た。それは、答えを自分の中に詰め込んでほしいという要求ではなかった。自分の知らないところで身体を形づくった決定の連鎖を調べたいという選択だった。

一行が資料庫を出るころ、夜の給水所では身元登録のない住民への供給が始まっていた。レイチェルは書類を、ロイは封印された録音円筒を運んだ。クロノスは二人の間を歩いた。先を行くことも、遅れることもなく。

東部地区の上空では、使われなくなったヘリックス社の看板が一度だけ点滅し、暗くなった。次の手がかりは遠い過去に隠れているのではなかった。住所があり、そこにはまだ誰かが待っているかもしれなかった。